

ほかのDACとはずいぶん違う
感覚的に言えば音がおいしい

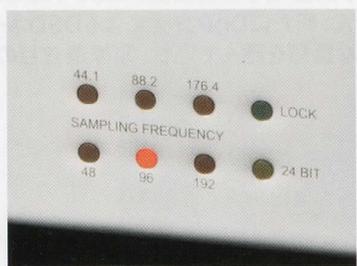
EARはイギリスのメーカーで1977年、ケンブリッジに誕生している。主宰者はティム・デ・パラヴィチーニだ。古くからのホームオーディオのファンからすると音のいい真空管アンプの設計者というイメージだが、最近になって展開し始めたデジタル関連の製品が面白い。まずCDプレーヤーのAcute3 CDをリリースした後、そのCDドライブ部を取ったような構成のDACコンバーターのDACute(ダキュート)を発表した。

ちなみにEARはホームオーディオ用だけでなくプロ用の機材もたくさん作っている。テープレコーダーやアナログレコードのカッティングマシン、コンプレッサーやリミッター、マイクロフォンアンプ、イコライザー等々だ。こうしたものを作ってきたEARが、USB入力を持ち、ハイレゾデータを再生できる製品を出してきたのだ。

アナログとかデジタルに関係なく 音楽の魅力、演奏の醍醐味を味わえる製品



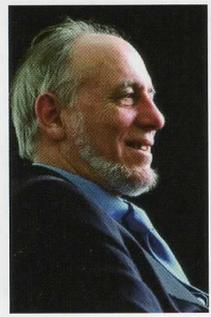
本機のリア部。デジタル入力はUSB(Bタイプ)のほか、RCA同軸×2、光TOSを用意。ボリュームコントロールが可能なので、さまざまなデジタル機器を組み合わせた「DACプリ」としての使い方も可能。アナログ出力はRCAとXLR(2番ホット)を用意する



本機のサンプルレートは最大で192kHzの音源に対応。インジケータも明るく見やすい表示だ



日本限定モデルとしてラック-mountの「Definitive DAC」も用意(¥837,900)も用意。スタジオで実績を積んだブランドらしい演出だ



DACuteを開発したEARのティム・デ・パラヴィチーニ。常に音楽性に溢れた製品を開発しつづけており、コンシューマーオーディオに留まらずレコーディングエンジニアやミュージシャンからも大きな支持を獲得。しばしば「天才」「鬼才」と称される人物だ。DACuteは「デジタル音源なのかと耳を疑うアナログライクな音楽性」というコンセプトで開発されたというのも、同氏らしいエピソードだ

興味津々で聴いてみた。率直に言って、ほかのメーカーの作っている音とはずいぶん違う。いい意味でアナログレコードを聴いている時のような滑らかさとか、音の線の太さ、音像の影りの深さ、立ち上がりの良さとか音が減衰していく時の消え際の美しさがある。感覚的に言えば音がおいしいのだ。帯域レンジが狭いわけではないが、音楽にとつて一番大事な中域の存在感が高く、音楽がよく鳴る製品。

別の言い方をすれば、レコーディングスタジオで採用されて、ミュージシャンが自分たちの演奏を聴き直した時にのれる音であり、エンジニアにとってはOKテイクを判断しやすい音という言い方をしてもいいかもしれない。

2本の真空管による出力段 音楽性を大事にした設計

ちなみに出力はアンバランスとバランス(2番ホット)を持つているが、どちらも5Vという非常に高い出力だ。フロントパネルのボリュームで音量調節ができるが、

実際に聴いてみるとほかのプリアンプを通さず、ダイレクトにパワーアンプやアクティブスピーカーを鳴らした方がDACuteの良

さがより明確に出てくる。そう言った意味ではDACプリという言葉の方をした方が適切に感じるトータル音作りだ。DAC部については「24bitマルチレベル・デルタ・シグマコンバージョン方式」と表示されているが、使っているDACデバイス等のパーツ名はない。しかしこの製品の最大の特徴は、2本の真空管PCC88とトランスカップリングを備えた出力段である。そもそもメーカーは「デジタル音源なのかと耳を疑うアナログライクな音楽性」を目指したと名言しているくらいだ。

こう書くと、真空管とかトランスとかアナログとか、回顧趣味的な製品で古い感じの音だと誤解されそうだが、そんなことはない。デジタルの音のデータには、PCMとDSDがあり、現状、それぞれに特有の音の傾向を持っている。特有の音を持つていること自体、いまのフォーマットでは実際の音を捉えきれないのではないかと、思う時がある。

DACuteで扱うデジタルデータはPCM系だけだが、アナログとかデジタルに関係なく、音楽の魅力、演奏の醍醐味を味わえる製品だと思っ